

川崎信用金庫理事長賞作品

「アレルギーを治す薬を作りたい」

栗木台小学校 5年 山口 莉緒

「ゴホッ。」のどがつまるように苦しい。

その日、私は国立病院にいた。食物アレルギーのゴマ 10g が食べられるかどうかの検査をしにいったのだ。お医者さんが言った。「残念ですが、ゴマ 10g の食物アレルギー負荷試験は反応してしまいましたね。」

私はゴマの食物アレルギーをもっている。以前、同様の検査をしたことがある。最初に国立病院でした検査はゴマ 0.5g が食べられるかどうかを入院して調べるものだった。病院のベットの上でゴマの入った食事を食べ、お医者さんにアレルギー反応が出ていないかどうかを見てもらったりする。検査は1日かかり。0.5g を食べれることが確認出来た後はゴマ 3g の検査をした。結局私は 3g までは食べられるけれど、10g は食べられないということが分かったのだ。

私のアレルギー体質は赤ちゃんの時に血液検査で判明した。その時はゴマだけではなく、小麦・卵などもあった。その後小麦・卵は食べられるようになったけれど、その間ホットケーキなどが食べることができなくて、保育園でさびしい気持ちになったこともある。私はあの時永遠に卵が入った食べ物を一人だけ食べられないのかなと思っていたし、ほかの人ができて自分ができないことをはずかしいことだと思っていた。

だから、今もしアレルギーを治す薬があったならばよいと思うのだ。今では小麦や、卵を食べることができけれど、ゴマはたくさんは食べることができない。もし間違ってゴマをたくさん食べてしまったら、病院で経験した時と同じようにアレルギー反応が出てしまう。それは私にとって命の危険を伴うことなのだ。

アレルギーを治す薬があるかお母さんに聞いてみた。「アレルギーを治す薬は今のところないけれど、誰かが開発してくれるかもしれないね。」とお母さんは言った。さらには、「製薬会社に就職して研究者になれば、あなたがそういった薬を作ることができるかもしれないよ。」とつけ加えた。それを聞いて私は、アレルギーの薬を作りたいと思ったし、そういった道があることを初めて知ったのだった。そのためには、たくさん勉強をして大学に入る必要があるし、大学に入った後もそのような勉強を続けていかなくてはならないだろう。

でも、もしそのような薬をつくることができなかつたらどうしよう？その時はアレルギーをもっている経験を生かしてアレルギーの人にとって住みやすい社会になるように、自分がその時できることをやってみたいと思う。例えばアレルギーの情報はいつも変わっているんで、それを必要とする人に伝える方法を考えたり、アレルギーを持っていない人にもそういった不自由な生活を知ってもらおう本をつくったりなど。私が大人になったときに今よりも、アレルギーを持っている人にもそうでない人にも住みやすい社会になるため、できることを考え続けていきたいと思う。.